

立ちどまる

からむしで紙をつくることに夢中になるうちに、昭和村での暮らしは3年目を迎えていた。織姫体験制度も3期目となり、村に残る人が増えていくにつれ、新聞やテレビで村の取り組みが盛んに紹介されるようになった。

私は最初の織姫として頻繁に取材を受けた。28年前の当時、30代で都会から地方へ移住することはまだ珍しかった。テレビの密着取材で東京まで同行されたり、何日にも亘ってカメラに追われたりすることもあった。

特にテレビの影響は怖いほどだった。新しく作り始めていたからむしを漉いたランプシェードは、色々なところから注文が入り制作が追いつかない。シンポジウムなどにもよばれるようになり、東京から村に移住した経緯や村の暮らしについて繰り返し話した。

農業に携わっている地元の青年の集まりで講演したときのことだ。1時間ほどいつものように話し終え、「何かご質問などありますか」と問いかけたとたん、会場から大きな声が上がった。

「あんた、自由だ。オレたちは跡取りだからここを動くわけにはいかねえ。あんたが何言ってんだか全然わかんねえ」

「失礼だぞ」と声がしたが、あとはしんと静まり返っている。何か応えなければ、でも謝るのは違う、と頭の中がぐるぐるしながら「私はこういう生き方をしています、というお話をさせていただきました。お聴きいただいてありがとうございました」それだけやっと言ってステージを下りた。

村の中でもいろいろな声が聞こえてくるようになった。

「あんなに注目されたら誰だって好きなことができる」

「昭和村じゃなくて和さんが目立ってるだけだ」

自分が取材を受ければ村に恩返しができるかもしれない、などと考えたことが思い上がりだったと気づいて落ち込んだ。プライベートでもうまくいかないことが重なり、ものづくりもできなくなった。



本当に昭和村でこの先も生きていけるのか。何のためにここにいるのか。お正月にも帰らなかった実家に電話し「もう帰ろうかな」と弱音を吐くと、母は笑って言った。

「ここで帰ってきたら絶対に後悔する。10年は頑張りなさい」

再び、人生を仕切り直すときが来たのだった。